

「野生復帰」の創刊に寄せて

兵庫県立コウノトリの郷公園 園長 山岸 哲

For the first issue of “Reintroduction”

Satoshi Yamagishi

Director, Hyogo Park of the Oriental White Stork

わが国で「野生復帰」という場合、2つの意味をもつ。ひとつは、「野外で傷病鳥獣個体を收容し、治療して野生に復帰させる」ことで、これは「リハビリテーション」と訳される。もうひとつは、絶滅鳥獣や希少鳥獣を「野外に安定した個体群として確立すること」であり、これは「リイントロダクション」と訳される。本誌で扱う論文や報文は、主に後者に関するものである。しかし、個体を対象にした、「治療法の改良」「飼育繁殖技術の改良」、また「野生鳥獣管理」あるいは「生物のハビタットを形成する地学的研究」に関する論考等も、もちろんのこと大歓迎である。さほど大切だとは思っていなかった「新しい技術」や「新しい考え方」が、「野生復帰」に重要な情報になると確信するからである。一方、野生鳥獣の保全に関し、「生息域内保全」と「生息域外保全」の連携が叫ばれて久しいが、その効果が実際に現れてきたのは、ごく最近のように思われる。

たとえば、山階鳥類研究所が中心になって進めてきた、コアホウドリ、クロアシアホウドリ、アホウドリの雛の野外での人工飼育の実験結果は、きっと動物園で今後の飼育繁殖に大きな参考になるだろう (Deguchi et al. 2012)。また、佐渡では、環境省のトキ保護センターで、トキを飼育増殖して、それを野生復帰させている。その際に、禽舎でつがいを飼育して、産卵させ、さらに親鳥に抱卵させて子育てをさせる。ところが、中には、卵を巣の下へ放り出してしまったり抱卵しなかったり、雛にうまく給餌できないつがいもいる。こうした場合には、センターでは、卵を孵卵器に移したり、飼育係が人工給餌

したりして育雛することもある。すなわち、禽舎内での話だが、「親鳥」と「人工」で育てられた、2つのグループのトキの雛が存在することになる。第1回目と2回目に放鳥された合計30羽のうちで、計画的にそうしたわけではないのだが、偶然半数ずつの2つのグループのトキたちが野外に出て行った。ところで、つがい形成に成功したトキは、「人工育雛された雛では、15羽中3羽であった」のに対し、「親鳥育雛による雛では、15羽中9羽」で、この違いは統計的に有意だったのである。この知見が、飼育・繁殖にフィードバックされて、飼育下ではなるべく親鳥任せの子育てが行われるようになってきた。本誌が、飼育関係者と生態学者や行動学者に共通の土俵を提供できれば幸いである。

ところで、以上述べたことは、これまでの既存のジャーナルでも満足できることかもしれない。本誌のもうひとつの特徴は、人との共生を含む、日本的野生復帰を世界に発信したいことと、研究者だけの発表雑誌にしたいくないという点だ。なぜならば、「野生復帰」は多くの場合そこに住む人々との関わりの中で遂行されるものであり、行政の方々や、地元NPOの人々の参画がなくては成し得ないものだからだ。こうした、目的を同じにする人々が、これまた同じ土俵で論議し合う雑誌は、これが初めてではなからうか。大きな期待を寄せて、本誌の成長を見守りたい。

引用文献

Deguchi T, Jacobs J, Harada T, Perriman L, Watanabe Y, Sato F, Nakamura N, Ozaki K, Balogh G (2012) Translocation and hand-rearing techniques for establishing a colony of threatened albatross. *Bird Conservation International*, 22: 66–81.